

式 辞

昨日までの春を運ぶ雨も過ぎ去り、今日の佳き日を祝うかのように、今年も天白台の桜とみつばつつじが、さても見事にほころび始めました。

本日ここに平成27年度長野県蘇南高等学校入学式を挙行するにあたり、ご多用の中、ご来賓としてご臨席を賜りました、宮川 南木曾町長様、樋口同窓会長様、木下 PTA 会長様をはじめ、地元町村、並び中津川市の教育関係者・同窓会・PTAの皆様方のご臨席を賜り、本校入学生の前途を祝福していただきましたこと、誠にありがとうございます。心より御礼申し上げます。

さて、ただ今入学を許可致しました52名の皆さん、入学おめでとうございます。教職員、在校生一同皆さんを心から歓迎致します。

併せて保護者の皆様、細やかな愛情をもってお育てになったお子様の晴れの姿をご覧になって、お喜びもひとしおのことと拝察致します。お子様の本校へのご入学誠にありがとうございます。重ねてお祝い申し上げます。

本校は、戦後昭和28年に創立された、地域住民の皆さんの悲願の学校であります、今年62年目を迎え、卒業生は社会の多方面で活躍しております。

蘇南高校は、初代校長 横内秀雄先生 の開校式で述べた言葉、「教育の基調として人間性を純粋な清浄なものにするに努めたいと存じます。山の高さが如く高尚な心持ちに、川の清らかな如く清潔な心持ちに、大気の澄めるが如く透徹した心持ちで、而も常に求めてやまない理想にあこがれる心、こういうものを人間性の基盤として養って行きたい。」の言葉を実践した教育活動が現在まで脈々と続けられております。

さて、ここで初代校長 横内秀雄先生に通じる、心の在り方についての話を二つ紹介致します。

一つ目は、池田晶子（あきこ）先生の「30歳からの哲学」という本からです。池田先生は君たちにこう問いかけます。

「どうだろう、生きていることは素晴らしいことだと思っているだろうか。それとも、つまらないと思っているだろうか。」

そして続けて、「生きていることは素晴らしいと思っている人にとって、生きていることは素晴らしい。何故って、その人が、生きていることは素晴らしいと思っているのだから。生きていることはつまらないって思っている人にとって、生きていることはつまらない。何故って、その人が生きていることはつまらないって思っているのだから。」

そして、「…そうだ、その通りなんだ。生きていることが素晴らしかったりつまらなかったりするの、自分がそれを素晴らしいと思ったり、つまらないと思ったりしているからなんだ。だって、自分がそう思うのでなければ、一体他の誰が、自分の代わりにそう思うことができるのだろうか。」と話を展開し、さらに考えることの大切さに話を導いていきます。

高校生の君たちの時期は、自我の確立する時期です。自分とは何か、自分はどこから来てどこへ行くのか。池田先生は、現代のスピードと効率重視、様々な情報が溢れる社会だからこそ、一歩立ち止まって、欲望に踊らされることなく、よりよい人間になるために、ゆっくり考えてみようと言われています。このことは大変重要なことです。

君たちの今こそ、長い人生の中で、考えることのできる時期、考えなければいけない時期なのです。

自分で、生きてるって素晴らしいと思えるように、クラブでも勉強でも、チャレンジして、壁にぶつかって、もがいて、悩んで、成長してください。蘇南高校はそれができる学校です。先生たちはいつでもその手助けをする準備ができています。

二つ目は、レイチェル・カーソンの言葉です。『沈黙の春』で有名な彼女のことは、環境問題に関心のある人ならすでに知っていることでしょう。彼女の最後の著作、「センス・オブ・ワンダー」から、一部分を紹介します。

「子供たちの世界は、いつも生き生きとして新鮮で美しく、驚きと感激に満ち溢れています。残念なことに、私たちの多くは大人になる前に澄み切った洞察力や、美しいもの、畏敬すべきものへの直感力を鈍らせ、あるときはまったく失ってしまいます。

もしも私が、すべての子供の成長を見守る善良な妖精に話しかける力を持っているとしたら、世界中の子供に、生涯消えることのない「センス・オブ・ワンダー＝神秘さや不思議さに目を見張る感性」を授けてほしいと頼むでしょう。

美しいものを美しいと感じる感覚、新しいものや未知のものに触れたときの感激、思いやり、愛情などの、様々な形の感情がひとたび呼び覚まされると、次はその対象となるものについてもっとよく知りたいと思うようになります。そのようにして見つけ出した知識は、しっかりと身につきます。」

私は、このセンス・オブ・ワンダーという言葉がとても好きです。神秘さや不思議さに目を見張る感性、つまり、このセンス・オブ・ワンダーこそが学びの意欲の本当の源泉なのです。ですから、蘇南高校で、皆さんは、皆さん自身が持つこの感性を精一杯磨いてほしいと願っています

翻ってみますと、教職員にもこの感性は必要です。いや教職員にこそ必要なのだとも言えます。かの「大村はま」先生は、「教師の仕事は、生きている子どもに生きた知恵を育てることです。そのためには、初々しい感動、新しい命のようなものが教師の側にないと、子供を惹きつけられません。」と述べておられます。

さて、いろいろ先人の言葉を紹介してまいりました。いつかは自分の言葉で語らなければと思っていますが、いまだに力不足であります。私も皆さんと一緒に蘇南高校で学んでまいります。

最後に保護者の皆様、本日より皆様の大切なお子様をお預かりすることになりました。教職員一同、誠心誠意お子様の成長を促していく所存であります。

古来中国では生まれた時の名を「諱（いみな）」、成人した時の名を「字（あざな）」といいます。成人した時に生まれた時の諱を呼べるのは両親と先生だけです。それだけ先生というものは親に近い存在です。保護者と先生と子供が一致した考えを持った時にその子の夢が実現します。

皆様方に、本校の教育活動につきまして深いご理解とご支援を賜りますようお願い申し上げます。

所感の一端を述べて式辞と致します。

平成二十七年四月四日

長野県蘇南高等学校長 杉村 修一